

特集

在宅診療の原点

～これまでを振り返る～



「これまでの歩み 残したいもの」

在宅診療の原点

鎌田 實 名誉院長
×
高木 宏明 副院長
ロングインタビュー

今年、高木宏明先生が在宅診療科の部長をより若い世代の宮坂晋太郎先生に引き継ぐという諏訪中央病院にとって大きな出来事がありました。そこで、これまでの在宅診療を振り返るべく今回のインタビューを企画しました。

編集部（以下編）…早速ですが、当院の在宅診療はどのように始まったのでしょうか。

鎌田…はじめは健康づくりで地域へ回っていて、脳卒中が多い地域だったので「脳卒中にならないために」っていう講演をして回っていた時に、講演の後「家に脳卒中で寝たきりの老人がいる」って言われて。僕、好奇心が旺盛だったので、寝たきり老人という言葉は知っていたけど実態は知らなかったから。「じゃあ、寄らせていただいていいですか」って。初めの頃はそんな感じでした。まず医者が訪問診察っ

という形で入って、その数年後、保健師のライセンスを持つてる人が当院にやって来て、その人を中心にして在宅訪問看護っていうのが始まった。

実際に行き始めると何が大切なのか徐々にわかるようになります。例えば、お風呂に1年以上入っていない人がいることがわかって、「お風呂に入れちゃう運動」なんてことを始めました。社協の方や病院の看護師、リハビリと協力した形です。そこからデイケアっていうものに発展していった。始めは医者で、途中から病院全体のいろいろな職種が応援をしてくれて諏訪中央病院の在宅ケアというのが始まった。

編…当時、鎌田先生は救命するための医療ということにも力を入れていたと思うのですが、その部分と在宅やデイケアというのはどのようなバランスで成り立っていたのでしょうか。

て温泉を半日貸してくれるとか。そちらに場所が移っていった。

高木…塩壺の湯ですか、今の？

鎌田…そう。で、ボランティアの人たちも、看護師さんなんかもみんな水着で来てくれて、お風呂に入れてあげて。そしてみんな入り終わると、老人楽団なんという、保育園の園長先生で定年退職した人が模造紙になんか「ここでトライアングルね」とか「ここでタンバリンね」とか書いてくれて。老人楽団なんているのをやって。認知症予防に結

鎌田…医者としては救急医療とか高度医療で患者を救うということを重視していました。それと並行して予防活動で病人、例えば脳卒中の患者を少しでも減らしたい。だけど、どうあがいてもゼロにはできないわけ。脳卒中になっちゃった人たちが後々困らないということも大事。つまり、病院の急性期だけ見てあとは知らないよでは、この地域では成り立たないんじゃないか。東京はいろんなそれぞれの分化がされているからいいけど。ここでは、急性期で命は助けたけど、あとは無理やり退院するだけではこの地域で成り立たないんじゃないかなっていう風に思っ。自分達の意識95%は病気の人を助ける（急性期医療という意味で）というところにエネルギーを注ぐ。

でも、それだけだったら東京の病院と変わらなくなっちゃうし競争したら東京の病院に絶対

勝てないわけで。残り5%がすごく大事じゃないかなって思っ。その5%を大事にすることで諏訪中央病院らしさが生まれるんじゃないかなってずっと考えて来ました。

編…その5%の部分とダイレクトに繋がるのが在宅とかデイケアとかそういう部分なのでしょ。うか。先日、（リバーサイドクリニックの）鍋島先生と雑談していたら、「大事なのは余白と遊びよ！」って言っていました。そういうことですかね。若い世代にもちゃんと引き継がれているなど感じます。

ところで、「お風呂に入れちゃう運動」のことは、ときどき話に聞くんですけども、あれはお家でお風呂に入れるということですか、それともどこかに連れ出してですか。

鎌田…「お風呂に入れちゃう運動」は最初はお家でやってました。社協も入浴サービスしてた



お風呂に入れちゃう運動。右が鎌田名誉院長



ちで、ましてや、その後の家族とか地域とかってやっぱり時々忘れてしまう。看護っていう視点はそれを忘れてないんだなって思いました。これを教えられて、それから、そういう意識を伝え続けたいなと院長の間とか保健医療福祉管理者をやってる時ずっと思ってきましたよね。自分ももう75歳になって現場から離れても時々いろんな先生、例えば鍋島先生や奥先生（元在宅診療科医師）なんかが「先生、往診に行きませんか」って誘ってく

る。そういう時に垣間見る、やっぱり、脈々とそういうのが息づいているかなって思います。さっきのQ&Dっていうことで一つ思い出すのは、僕がかつて診ていたおばあちゃん、胃がんとわかって。診断はついたんだけど胃がんの手術はもう高齢のためにしないという判断を本人も息子さんとした方がいて。僕が引退して途中からは高木先生が往診してくれていたんだけど、ある時、高木先生が「先生一緒に行きませんか」って誘ってくれて。その時の光景を思い出します。こないだいい光景で在宅でこう看られていくのかな、おばあちゃんはちゃんと笑顔があったし、家族は疲れてなかったですよね。とてもいい在宅ケアの姿でした。

いろいろな事情で皆が在宅を選べるわけではないけど、在宅を選んだ方が、なんか幸せ度というのが、つまりクオリティ・オブ・デスが豊かになってるんじゃないか。ここへ来てもうすぐ50年なんですけど、脈々とそれは繋がってるかなっていうふうには思いましたね。

編…ありがとうございます。今、話にも出た高木先生はどんなきっかけでこの病院で在宅をやろうになったのでしょうか。

高木…在宅を勉強したいと思って僕は来しました。昭和62年に大学を卒業して地域医療をやりたいと思って岐阜県の高山の病院を選択して働いていました。全人的医療という言葉が流行りで自分もそれを実践しようと思っていた。その当時、がんの告知って一般的じゃなかったんですよ。でも、がんの告知はした方がいいと思って、ターミナルケア研究会っていう勉強会を立ち上げて、本をみんなで読み合わせて学び、がんの告知も実践するように。そうする中で、「家で死にたい」っていう患者が出てきました。80代の肺がんの男性でしたけど、その方を初め

果的にはなったんじゃないかな。

編…デイサービスの原点ですね。

鎌田…そうなんです。そのうちにね、夢科の温泉をお客さんが少ない時に貸してくれるとかね。なんか、みんなが協力してくれるようにだんだんなったんですよね。それがデイケアに発展していく下地作りとか、ボランティア、社協、行政の保健師さんとか一体となった感じ。

編…そこで出てくるボランティアさんっていうのは、どういう人たちだったんですか。

鎌田…ボランティアはね、50歳を過ぎて子育てが終わった人たちが社協のボランティアスクールに行っただけでも、要するに、こういうことするかって、雑巾を縫ったりして特養に雑巾を寄付するとか、そういう活動しかなかったんですよ。で、もっと人とふれあうボランティア活動がしたいって。僕たちが病院内で各職種の人たちが集まってやる「ほろ酔い勉強会」っていう、

その頃はね、お酒が出たんですよ。もう仕事終わったから、飲みたい人は飲んでもいいよねって。今ではとてもそんなことやれないけど、で、名前が「ほろ酔い勉強会」って。

編…文字通り「ほろ酔い」だったんですね。とてもおもしろいですね。他に印象に残っているらしいやることはありますか？

鎌田…あとはね、僕たちの在宅ケアの特徴は、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）って言いますよね。それに加えてQ&D（クオリティ・オブ・デス）みたいなものも大事にしていた。クオリティ・オブ・デスで一番勉強になったなと思ったのは、（ある患者さんが）亡くなって一ヶ月くらい経った後、僕が別の訪問診療に行く時に「先生、帰りにお線香あげに行きませんか」ってある看護師さんが誘ってくれて。その頃は諏訪中央病院で書いてある箱のお線香があつて、それを持ってご挨拶に

行って。お線香あげさせてもらって。褒めていただいたり感謝していただくことが95%ぐらいで。時々2・3%は、あの時ああいう風に言われたけど、とってもショックだったとかって、僕たちが思ってもないことを言われて。つまり僕たちが反省しなくちゃいけないようなことを言われたりして。亡くなった後も行くところまで見てたお嫁さんが、介護鬱になっていることに気づいたり、僕たちが「あなたがいたおかげでおいちゃん幸せだったよね」ってひとこと言っただけのことですごく苦労した1年間が全部清算されるとか。亡くなったなら終わりではないということ。そのことを看護師さんたちが「先生ちよっとお線香あげに行きませんか」というひとことがきっかけで学びました。

他にも訪問看護師さんに教わったなあと思ったのは、訪問看護師さんの姿勢。うちの訪問看護の特徴はなんと言っても、介護してる家族を支えること。「自分たち（看護師）は週2回とか多くて3回訪問するけど、基本的には在宅はお家の人たちが看てるわけで。お家の人たちがどうしたら肉体的にも精神的にも疲れない介護ができるか、その部分を支える、それが自分たちの仕事です。」って言われた時がありました。医者はともすると病気のある臓器や病気に視点が行きがちで、患者を二人の人間としてみることを忘れが





は診れませんという風に断られて。それでも、なんだかんだともがきながらも、ちよつとやっていううちに在宅で看取りができたんですね。家で死ぬってこんなにいいのかと思つて。まだまだあの頃の病院は点滴を散々やって、全身がむくむくになって亡くなるなんていうのも珍しくなかった。でも、全然そんなじゃなくして楽そうに最後も迎えられるというのを目の当たりにして絶対在宅だと思つた。そんな時に、創刊されたばかりのJIMという雑誌（現在の「総合診療“誌”」の巻頭言に鎌田先生が、在宅をやつて70人の在宅患者さんを

診てて家で7割を看取つていると書いてあつた。「そんな病院があるのか!」と思つて諏訪中央病院で勉強しようと思ひました。いきなり電話したらうまくいかないなと思つて鎌田先生に宛てて手紙を書いた。勉強させてくださいつて書いたら直接電話をくれて、僕は忘れもしない午前中外来をやつたら先生に電話ですつていつて、こんな忙しいのに誰だと思つたら、「鎌田です〜」って「きてもいいよ〜」って言われて外来で飛び上がつて「やつた〜」って今でも覚えてる。平成7年に来たら在宅はもちろん、当時いた内科の先生は全員が訪問患者を持つて、老健やすらぎの丘ができてちよつとした頃で。

鎌田…そうかその時期か。宮坂圭一先生がやすらぎの丘の初代の施設長だから、宮坂晋太郎先生の父親がいた時期だ。

あるのだけど。さっき話の出た有名病院では、そういう意識のもとに物好きな先生が専従でやつてゐるっていう風な位置づけになつてゐるんじゃないかな。それにしてみたら

という議論があつた。じゃあ在宅をどういう風にやるかについて専従化、その病院を見て専従化はやっぱり良くないなと思つた。色んな意味で、一つは色んな先生が訪問診療に出るということとは病院に風穴が開いてゐるということ、そのことが大事だと思つた。地域の風が吹いてゐるというのが一つの条件じゃないかな。もう一つは元々の主治医との関係を切る、切つてしまわなければいけないこともきつとあるし、それから結局その当時やっぱ僕も言われたことあるんですけど、在宅って物好きがやる診療だよねって言われたことが

とその当時考えたし、その考えは今も変わらない。諏訪中央病院は専従化はしないで、その患者さんとの付き合いを切りたくないという先生がいつでも出られるような、むしろそういう雰囲気・文化・体制がある方が大事だつていう風に思つてやつてきたので、そのことは良かったなと思ひますし、今後も引き継いでつてもらいたい理念ではあります。それはやっぱり鎌田先生がそうやって作つてきたものを最初意味もわからずやつてたのが後から僕が意味付けができていったということだと思ひます。これが、諏訪中央病院が地域に

高木…宮坂先生が辞めたあと、平成7年、来てすぐでしたけど僕に施設長をやれと言われて施設長になつた。勉強したいと思つてきたのに教えてくれるはずの安藤先生（現北山診療所長）は僕と入れ替わりでリバーサイドクリニックに行つてしまつた。「えっ行っちゃうんですか!」と聞いたら「うん、あとはよろしくね〜」ってやつて行つてしまつた。

諏訪中央病院に来てよかったと思つたことの一つは、やっぱりたくさんいろいろな先生がそれは内科に限らず訪問、外に出てくれるんですね。そういうなんか文化があつてみんなて寄つてたかつて在宅やつてゐるところ。僕が諏訪中央病院以外で勉強に出るか迷つた別のある地域医療領域の有名病院では、専従が1人か2人いて、訪問診療つて全部その1人の先生が診るというスタイルで、「なんか違うな〜」と思ひました。当院でも濱口先生が院長になられてすぐぐらいたつたと思ひますけど、急性期中心にやつていくならある程度役割分担を明確にするっていうことも必要かもしれない

高木…そこに残つていたのは訪問看護のスタッフと人間ドックのスタッフとソーシャルワーカー。初めて会う人たちでした。そういう仕事をする人。まあ楽しくつて。それでやつぱりやつていくうちに、その地域で生活する人たちにとって特に在宅で生活していく人にとって、医療は必須ではあるけれども全てではないということも、もちろんすぐ分かりましたし、それからその医療を支える医療は医者だ

密着した医療をやるという、そういう一つの形なんだなと思ひました。

鎌田…例えば床ずれでかか

ている時に皮膚科の先生に声がかかつて、じゃあ皮膚科の先生が1回行つてみようかとかつていうのが諏訪中央病院の中には、まあなんとなくやつてもいいんだよねつていう空気があつた。在宅という場に来て欲しいと専門家に言つてもいいし、言われたらやつてもいいという、そういうのが脈々と残つてゐるところが諏訪中央病院の良いところなのかな。

高木…色々な条件が合えば皮膚科以外でも産婦人科とか、整形の先生に来てもらった経験があります。「いや、貴重な体験をさせてもらいました」って喜んでもらえた。こういうフレキシブルさ、自由さのことを穴が開いてゐると表現してゐる部分もあります。そういう穴が開いてゐるので皆が外に出やすい。

鎌田…まあ、いい加減、みたいなところがあるというか。（笑）組織とかがね。

高木…ある種のルーズさとか、いい加減さは宝物で、とても大事なんです。だから余白とか穴とか、なんかそういうのは文化として大事だと思う。（笑）あんまり価値がなさそうに見えるものに実は価値があつて、理念がそこに現れるつて他の先生も口にしてましたね。

鎌田…多分、組織つてガチガチに硬くルールで決められるよりも少し遊びがある方が長く変わつていく力もあるんじゃないか。僕（こゝへ来て）50年なんだけど、諏訪中央病院は見事に急性期医療をしながらも、在宅医療や緩和ケアを捨てないでやつて来れてゐるということは、稀有な発展をしてゐるんじゃないかなつて気がしますよね。横から見ると。

（聞き手…編集部 渡辺慶介）

好きな言葉は「努力に勝る才能なし」



メディメシ…「メディカル・スタッフ(医療従事者)のご飯」の略

第15回



医療現場の束の間のひととき

臨床検査技師

はま
なおゆき
直幸さんの回



医療の現場は日々忙しいイメージ。そんな中でお昼ごはんのひとときにお邪魔し、色々な角度から人物像を探るコーナー。

臨床検査技師とは、病気の診断や治療に必要な臨床検査を行い、医師に検査結果を提供する専門職です。臨床検査では血液や尿、臓器から採取した組織などの検体を分析したり、心電図や超音波など身体の機能を調べる検査が行われています。

浜さんが担当しているのは細菌検査で、検体から得られた細菌を培養し、患者さんの感染症の原因をつきとめます。そして、原因と考えられる細菌に対して、どんな抗菌薬を使えば効果があのかを調べ、治療につながる情報提供をしています。また、新型コロナウイルスなどの検査も担当しています。

裏方の仕事と話す浜さんですが、医師との情報交換でこちらの提供した情報で治療に役立っているとお声がけいただくことがあり、わずかながらでも力になれているとやりがいを感じるそうです。

そんな浜さんのお弁当は休日を作り置きするなどして手作りを心がけているそうです。色とりどりのご飯やおかずでとても美味しそうです。

だと話す浜さん。特技である剣道の先生から、実力をつけるには何より努力を続けることが大切と教わったそうで、仕事においても専門誌を読んだり勉強会に出席しては最新の情報を取り入れるよう努力しています。また、医師からの質問も多いため努力を重ねて知識を得ることで信頼へとつながっているそうです。

患者さんとは顔を合わせることが少ないと話す浜さん。裏方の仕事ではありますが、最適な治療につながる大切な業務ですので興味を持っていただけたら幸いです。

第13回

病院祭

開催しました
2023.10.21(土)

病院祭実行委員会事務局 矢崎 陽子

復活した病院祭

コロナ禍の昨年は、平日に分散して行う「すわちゅうT h a n k s W e e k」という形で病院祭を行いました。今年は土曜日開催により「多くの地域の皆様に、病院を身近に感じてもらう病院のことを知ってもらう」本来の目的にたち返り、感染予防のためのマスクの着用や飲食の一部制限を設けた中で、4年ぶりの開催が実現しました。

当日は、たくさんの方のご来場くださり、健康チェックや手術室見学のほか、体験プログラムを興味深く楽しんでくださいました。また、書道パフォーマンス、吹奏楽や古典ギターの演奏では地域の高校生の皆様が協力してくださり、スタンブラリー、キッチンカー、やすらぎの丘の利用者様の作品展示なども好評をいただきました。

地域の皆様のたくさんの方の笑顔に触れることができ、とてもうれしく思いました。

足を運んでくださった皆様、協力してくださった皆様、地域ならびに職員の支援によって無事に開催できたことに感謝申し上げます。

ありがとうございました。



グリーンボランティア



ハリ・ポッターのお灸の部屋



トロミカフェ



諏訪二葉高校
書道パフォーマンス



諏訪清陵高校
古典ギター演奏



手術室見学



腹腔鏡下手術模擬体験



東海大諏訪高校
吹奏楽演奏

第1回

鍼灸師のつぶやき

鍼灸師

伊藤 美咲
いとう みさき



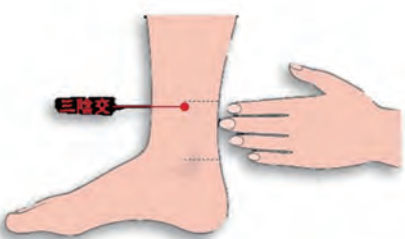
秋冬は気温が下がり身体が冷えますね。冷えてくると何となく調子が悪い、そんなことはありませんか？東洋医学には「寒邪」という考え方があります。寒邪が体表に入ると身体が冷え、体内に入ると力などの病気になる、節々などの痛みといった不調が症状として現れます。体温が高くて、寒さを感じていなくても、実は知らず知らずのうちに身体が冷えてしまっている。

そこで今回は寒邪に負けないために今日からできるセルフケアをご紹介します。

冷え性の方もそうでない方も明日の健康のためにぜひ取り入れてみてください。

冷えは足元から！ 頭寒足熱を意識！！

ツボ：三陰交
内くるぶしから指4本分上のところ



痛気持ちいいくらいの強さで押すもしくは
せんねん灸やカイロで温める
足湯や靴下などでの防寒対策も効果的◎

第36回

● ● ● 病院から地域へ ● ● ●
ケアについて名誉院長 濱口 實 はまぐち みのる

哲学者の鷗田清一の著書にタコ八郎のことが、ケアの真髄として紹介されています。私が看護学校の哲学の講義を頼まれて10年余り経ちます。ケアの話をする時は、タコ八郎のことをよく話してきました。

タコ八郎は元日本フライ級チャンピオンのボクサーで引退後、コメディアン、俳優として活躍しました。先輩芸人や多くの仲間にも愛され可愛がられました。しかし破天荒なところがあり、飲み屋で片耳を1/3ほどかじられたのを売りにしていました。1985年7月に真鶴町の海岸で晩年に溺死しました。44歳でした。座右の言葉が「めいわくかけてありがとう」と「めでしたが、後に彼と親交のあった人たちが新宿に」たこ地蔵を建立しました。その地蔵には「めいわくかけてありがとう」と刻まれています。

前置きが長くなりました。ケアのことをわかったつもりでいたことが、実はわかっていなかったことを

最近自覚しました。ケアに対する

考え方は例えば先に生まれたものが、後に生まれたものに対するのが世話であるのとは逆に、先に生まれたものに対するのがケアだという考え方があります。自分の介護をしてくれる人に介護のやり方を教えて障害者手当をもらっているという障害者がいました。多少違和感があるかもしれませんが、それもケアの一種であるとするケアは親孝行や返礼の論理に帰結するばかりではなさそうです。

タコ八郎の墓石の言葉は最後まで自分に付き合ってくれた人たちに對する感謝だったのでしよう。鷗田は、この人たちはタコ八郎のために自分たちの時間をあげたのだと考えました。このありがたうの中には、迷惑をかけたことに対するお礼だけではない気持ちがいっぱい入っています。ありがたうという言葉の軽くて深い意味をもう一度考えてみたいと思います。

第8回

● ● ● 認定看護師からのチョットいい話 ● ● ●
「ピンクリボンという言葉をこ存じですか」がん化学療法看護認定看護師 有賀 智美 あるが ともみ

皆様こんにちは
突然ですが、ピンクリボンという言葉をご存じでしょうか？

ピンクリボンは、乳がんの正しい知識を広め、早期発見、早期治療を啓発するシンボルとして、1980年代にアメリカで誕生して以来、世界各地に広まり我が国日本でも徐々に浸透するようになりました。

10月はピンクリボン月間でした。10月1日に『ピンクホリデー』として、東京タワー、レインボーブリッジなどがピンク色にライトアップされ、大勢の人へ視覚という形でピンクリボン運動の認知度向上へ貢献しています。ご覧になった方や、現地に現に行った方もいると思います。

日本人の女性のうち乳がんを発症する割合は約12人に1人といわれています。乳がんが死亡する女性の数は年間約1万人弱とされ、乳がんキャンペーンは年を増すごとに拡大しています。



決して他人事とはいえない身近な病気である乳がんについて、より多くの人が理解を深め、早期発見、早期治療の大切さを伝える事ができたらと思います。

違和感を感じている方、不安がある方、お一人で悩んでいる方、迷っている方は早めの受診をお勧めします。

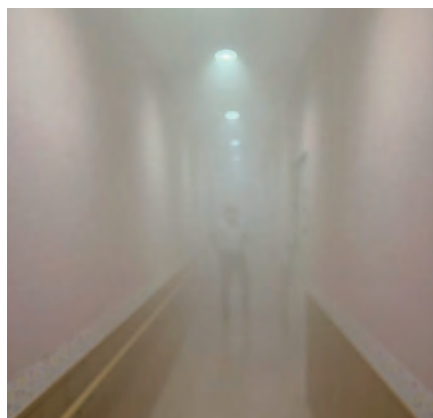
第14回

● ● ● 減災を身近に ● ● ●
冬の準備防災士 4南病棟 看護師 濱 貴彦 はま たかひこ

暖房が必須の季節になりました。あなたのお家で防火対策はされていますか？最優先は火災発生直後の対応を知ることです。火災に気がついたら、火の大きさに関わらず119番通報、消火、避難を共有、実施しましょう。

火災の死者のうち、46・9%が逃げ遅れ、つまり『火災に気が付かず、煙や炎に囲まれて逃げられなかった』のです(消防庁消防白書)。住宅には寝室などに火災報知器の設置が義務付けられています。寝ている間の火災は他人事ではありません。未設置のご家庭では設置しましょう。以前、とても寒い12月の夜に家屋火災が発生しました。1階からの火災でしたが、あつという間に2階の窓から炎が現れました。四方、中から放水しましたが一向に火の手は弱まりませんでした。この時、火災報知器があれば、ここまでの被害にならずに済んだかもしれません。

病院には「防災センター要員」と



いう防火対策、初期消火、地震発生時の対応の資格をもった職員の配置が義務付けられています。吉澤院長はこの資格を保持し続けております。病院、患者様、ご家族、スタッフを守ろうという熱意を感じていただけますか？

また、当院では室内で発煙筒を焚き、煙の中で行動する訓練を実施している全国でも数少ない病院です。他病院からも高い評価をいただいております。スタッフ全員で地域の医療を守り火災や災害に備えています。

3人目

● ● ● 研修医は今 ● ● ●

増 孝哉先生インタビュー はなわ たかや
(平成29〜30年度研修医)

—— 諏訪中央病院で働くきっかけを教えてください

増…北アルプス涸沢の山岳診療所で大学の先輩である藤川先生とご一緒し、充実した研修の様子を伺ったのがきっかけです。その地域の患者さんを責任もって引き受ける病院で研修したいと思っていて、諏訪はとても素敵なおとところだと感じました。

—— 実際働いてみていかがでしたか？

増…全国各地から熱心な医師が集まっている、稀有な教育病院だと思いました。ここで医師生活をスタートできて本当に良かったと、心から感謝しています。その科の疾患だけでなく患者さん全体を診ようとする諏訪のマインドは、今も私の理想形です。

—— 諏訪中央病院ならではの、印象に残っているエピソードはありますか？

増…あります。人生最後の時間を家で過ごしたいと仰った患者さんに、退院日の夜トラブルがあつて…指

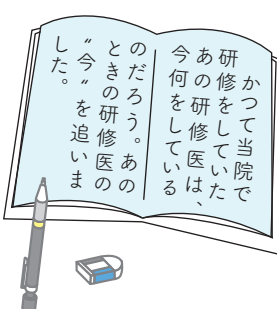
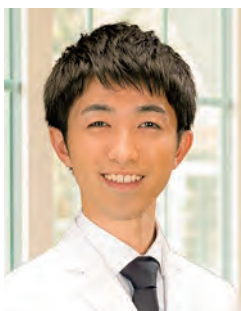
導医の奥(知久)先生に電話したら「15分後に現地集合」と(笑)。真夜中に患者さんのご自宅で生活の仕方を模索する経験など、間違いなく諏訪中央病院でしかできないことだったと思います。

—— 当院での研修終了後も様々な活動をされていますね

増…患者さんに生じてしまった病気を治すだけではなく、患者さんが取り返しのつかないことになる前に予防できる環境づくりが大切だと感じ、人格形成や生活習慣の確立に携わるべく、母校の小児科研修に進みました。今は東大小児科の助教として医学生や研修医・専攻医を教えつつ、高校での教育活動や、医療AIの社会実装などにも尽力しています。

(聞き手…リウマチ膠原病内科

山口 俊大)



やざき内視鏡クリニック

内視鏡科 / 消化器科

住所：茅野市ちの315-7 電話：0266-78-3714

【検査】胃カメラ（経口・鎮静あり）、大腸カメラ（鎮静あり）
心電図、胸部X線検査、血液検査、一般検診、
簡易検診、ミニドック

【診療予約】完全予約制

【交通アクセス】駐車場 10台あり

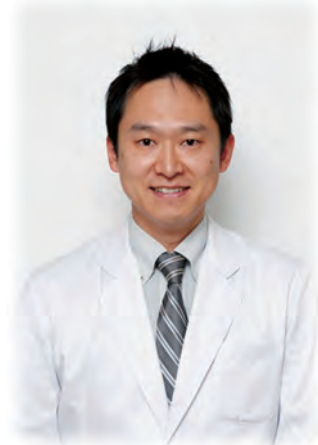
<https://yazaki-endoscopy.com>

ホームページ
より予約可能

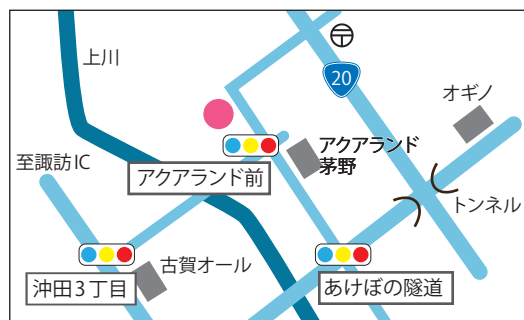
受付時間・曜日	月	火	水	木	金	土
午前8:30～11:00	○	○	○	○	○	○
午後1:00～5:00	○	○	休	○	○	休

2014年より、諏訪中央病院にて消化器、内視鏡診療に携わってまいりましたが、この度、2023年10月、茅野市ちのに「やざき内視鏡クリニック」を開院いたします。これまでと変わらぬ確かな技術のご提供とともに、胃・大腸内視鏡検査をより身近に感じていただけるような、近隣にはないクリニックとして開業いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、より苦痛の少ない鎮静下内視鏡も対応していますのでご相談ください。



院長：矢崎 利典医師



諏訪中央病院 年末年始のお知らせ

12月29日(金)～1月3日(水)は休診です。救急体制での診療となります。

12/31(日)・1/1(月)・1/2(火)（午前9時～午後5時）の3日間は、当院が茅野市・原村地区の当番医となります。なお、小児科の受付時間は午前9時～午後3時です。

診療時間以外の診察に関しましてはお電話にてお問合せください。TEL:0266-72-1000

※病状によって、常勤の専門医がいない診療科では十分な対応ができないことがあります。

<救急外来からのお願い>

救急車による患者さんの搬入や重症患者さんの治療、緊急手術等により、診察までの待ち時間が長引きご迷惑をおかけする場合がございます。また、重篤な患者さんへの対応や他の緊急当番医からの搬送などにより、診察の順番が必ずしも受け付けた順番どおりにならない場合もございますので、あらかじめご了承ください。

院内施設の
営業に
ついて

	12/28(木)	12/29(金)	12/30(土)	12/31(日)	1/1(月)	1/2(火)	1/3(水)	1/4(木)
売店「たんぽぽ」	通常営業	10時～15時半	10時～15時半	休	休	休	10時～15時半	通常営業
食堂「エスカール」	通常営業	休	休	休	休	休	休	通常営業
理容室「ラベンダー」	通常営業	通常営業	通常営業	休	休	休	休	休



諏訪中央病院

Suwa Central Hospital —あたたかな急性期病院—

〒391-8503 長野県茅野市玉川4300

電話 (0266) 72-1000 (代)

FAX (0266) 72-4120

E-mail byosin@suwachuo.jp

HP www.suwachuo.jp

ご意見・ご感想
お聞かせください

基本理念

やさしく、あたたかい、たしかな医療を目指す

医療目標

1. 充実した救急医療
2. 安全な医療
3. 患者さんの権利を尊重した、思いやりのある医療